



Japan Leather Award
2023

ジャパン
レザー
アワード
2023



ジャパンレザーアワード2023 選定作品

2023年で16回目の開催となったジャパンレザーアワード。革製品のコンテストとしては国内最大のイベントである。応募作品も回を重ねるごとに洗練され、秀逸なプロダクトが集まるようになった。審査員からは、受賞には及ばなかったものの評価したい作品があるという声を受け、今年から「選定作品」を新設することとなった。



01



02



03



04



05



06



07



08



09



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23

01.石橋 善彦さん
パンチングレザー刺し子
ライダーズ (メンズ)

02.宝田 和久さん
レザーブレードハット

03.中村 光春さん
革にゴブランをウメコンだ
ボストンバッグ

04.太田 駒子さん
お母さんの靴

05.太田 駒子さん
子供の靴

06.岡田 祥兵さん
ラグビーバッグ

07.野沢 浩道さん
Memory of PAM

08.住田 千佳さん
レザーライフート

09.西野 裕二さん
擬態

10.安田 祐樹さん
エレガント・バッグ

11.加藤 友樹さん
一重仕立て
ラムレザージャケット

12.野島 孝介さん
+Z /
Beyond PanChoppari

13.瀧本 武さん
大人のカジュアルに合う
ドレススニーカー

14.瀧本 武さん
Boots DECO

15.平田 史明さん
トートバッグ

16.四野宮 裕香さん
object

17.小林 成光さん
BOAT WALLET

18.井上 篤さん
Red Shark Boots

19.松村 美咲さん
ESTA

20.三上 良弘さん
レザーカービングシューズ

21.加藤 友樹さん
ラムレザーライダース
ジャケット

22.細田 公一さん
Ambient II

23.工藤 サトミさん
ミライツルクツ

24.堀家 亮さん
レザーサンダル

25.徳永 直孝さん
紺と橙の世界



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47

26.青木 健治さん
cocoon

27.大熊 啓一さん
BORSA CLASSICA

28.谷藤 嵩さん
Jabara

29.大山 敬志さん
不自由の裏

30.多田 智美さん
have roots

31.斉藤 慎二さん
表裏一革

32.服部 清隆さん
衝撃の一手
牛革性将棋セット

33.板垣 江美さん
バンプキンバッグ

34.藤原 崇晃さん
Only one Shoes

35.紀井 長さん
REshuse16 [1998&2004 LEATHERX
KNIT UPPERXvibram LB078 Canter]

36.中山 智介さん
レザービアクーラー

37.大木 佳那子さん
Balance

38.椎名 賢さん
適革適所

39.宮代 結菜さん
CORE

40.山崎 耕嗣さん
ガマ口手さげバッグ

41.花崎 恭平さん
tower

42.椎名 賢さん
イノシシの革で作った
スマホホルダー

43.北崎 厚志さん
ジビエ鹿革半纏
(見立文覚宗三郎滝行図)

44.宇佐美 典子さん
木の音を奏でる
タップシューズ

45.菊池 敏哉さん
紳士靴

46.富田 貴昭さん
ワークブーツ

47.野口 正人さん
クラッチバッグ

48.前田 悠貴さん
Saluki



ウェア&グッズ部門
ベストプロダクト賞

石橋 善彦さん

ISHIBASHI Yoshihiko

作品名

パンチングレザー
刺し子ライダーズ(メンズ)

所属

有限会社 オベリスク

受賞作品詳細は
こちらへ



受賞者動画を
配信中!



プロによる本気の遊びが 独創的な作品を生み出す

パンチングレザーと刺し子を組み合わせた唯一無二のレザージャケットで、
見事グランプリを受賞した石橋善彦さん。
受賞作についてはもちろん、時間とコストにとらわれず創作を続けてきた
彼のものづくりに対する姿勢について、じっくりと話を聞いた。



オベリスクにて。写真上は「ジャパンレザーアワード
2016」の部門賞受賞作(左)とグランプリ受賞作

レザーウェアとしては2009年以来14年ぶり、レザージャケットとしては初となるグランプリ受賞を果たした石橋さん。「2016年に部門賞をいただいたことはありますが、今回はグランプリということで喜びもひとしおでした」と、満面の笑みを見せる。

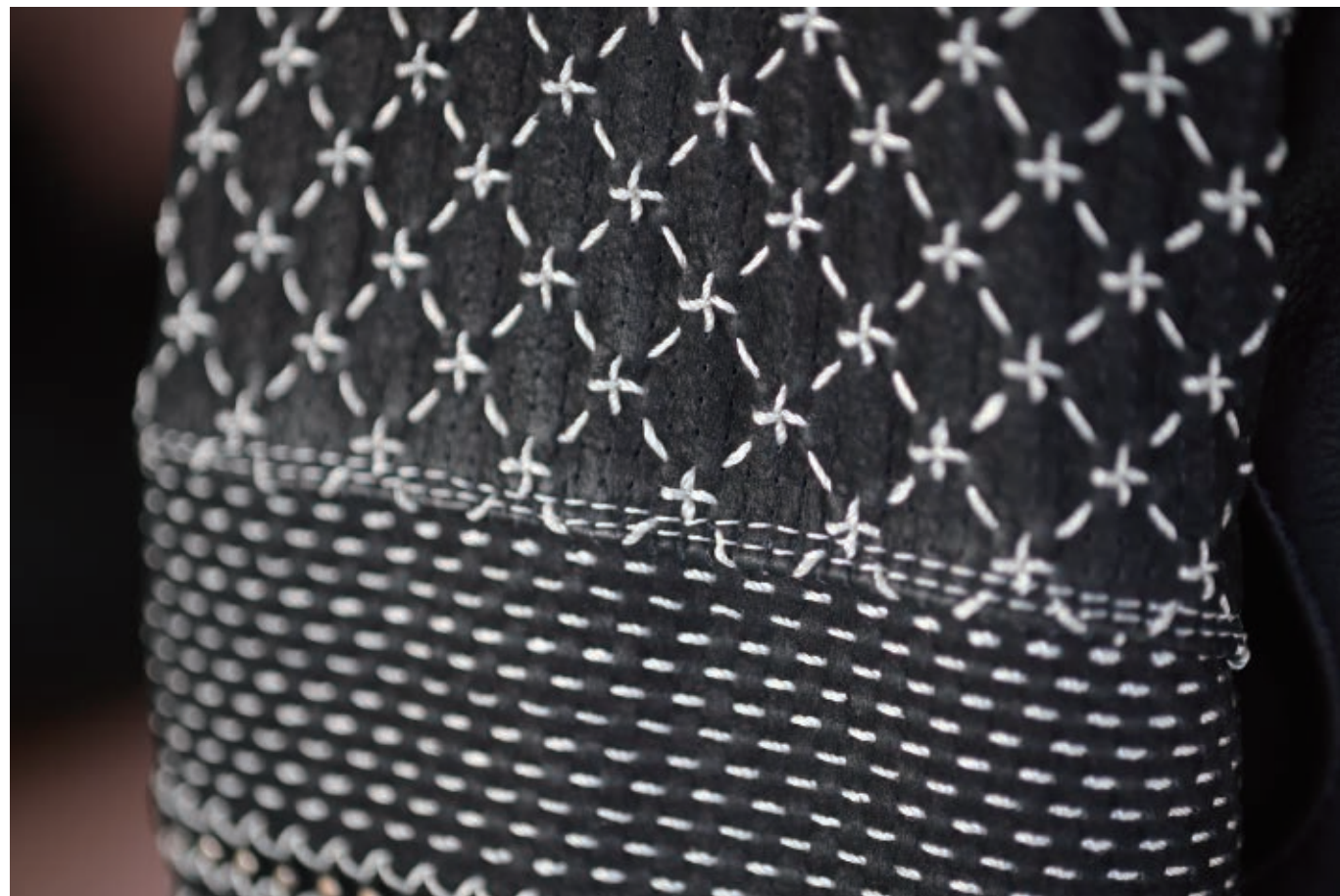
受賞作品は、パンチングレザーに刺し子を組み合わせたライダーズジャケットだ。刺し子とは、布地に刺し縫いをして糸によってさまざまな模様を描く手法のこと。革に応用する着想を得たきっかけは、家族からのある依頼だった。
「妻から『デニムに穴が開いたので寒いではないか』と頼まれたときに、修繕の方法として、以前から興味があった刺し子についていろいろと調べたんです。その過程で、刺し子は革との相性もいいのではないか、ということに気づきました」

革と刺し子の幸運なる邂逅 修理前提のサステナブルな仕様

刺し縫いをするためには革に穴を開ける必要がある。そこで思いついたのが、パンチングレザーの使用だ。等間隔の穴が開いている革ゆえ、刺し縫いをするにはうってつけだった。

「すでに誰かがやっている手法だろうと思っていたのですが、意外にもそうではなかったんです。おそらく、ハンドクラフトの手法である刺し子とスポーティなパンチングレザーは方向性が真逆なので、誰も組み合わせることがなかったのかもしれませんが」

オリジナリティにあふれるコンビネーションを考案した石橋さん。自身がBMXに乗っていることから動きやすさを重視し、ベースとなるパンチングレザーにはソフトなヌバックを使用。



手描きのデザインをもとに完成させた今回の受賞作。間近で見ると刺し子の繊細さに圧倒される



脇の部分にマチを追加して腕を上げやすくするなどの工夫を凝らした。

もうひとつ注目したいのが、袖のヒジ下および上腕の後ろ側に取り付けたファスナーだ。刺し子の糸が切れた際には、ファスナーから手を入れて修理することができる。じつはこのファスナー、予期せぬエラーから思いついたアイデアを採用している。「刺し縫いで革を引き締め続けた結果、革全体が4〜6パーセント縮んでしまったんです。その縮みを補うためにファスナーを取り付けたのですが、結果的に修理をしやすい仕様になりました」

ファスナーこそ怪我の功名であったものの、石橋さんの創作の底流には「可能な限り長く、できれば一生着られるものをつくりたい」という思いがある。修理を前提とした受賞作にも同様のマインドが反映されているといえるだろう。

時間とコストにとらわれず 創作意欲のおもむくままに

石橋さんは、レザーウェアをメインで扱うアパレルブランド「オベリスク」のプロダクトマネジャー。多忙な仕事の合間を縫い、ものづくりを続けてきた。「僕が制作するものは、基本的に自分が着たいものです。レザーアワードに関しては毎年応募してきたわけではなく、良いものができた年は応募するという感じですね。受賞できない年も応募作を着て楽しんでいるので、サステナブルだと思います（笑）」

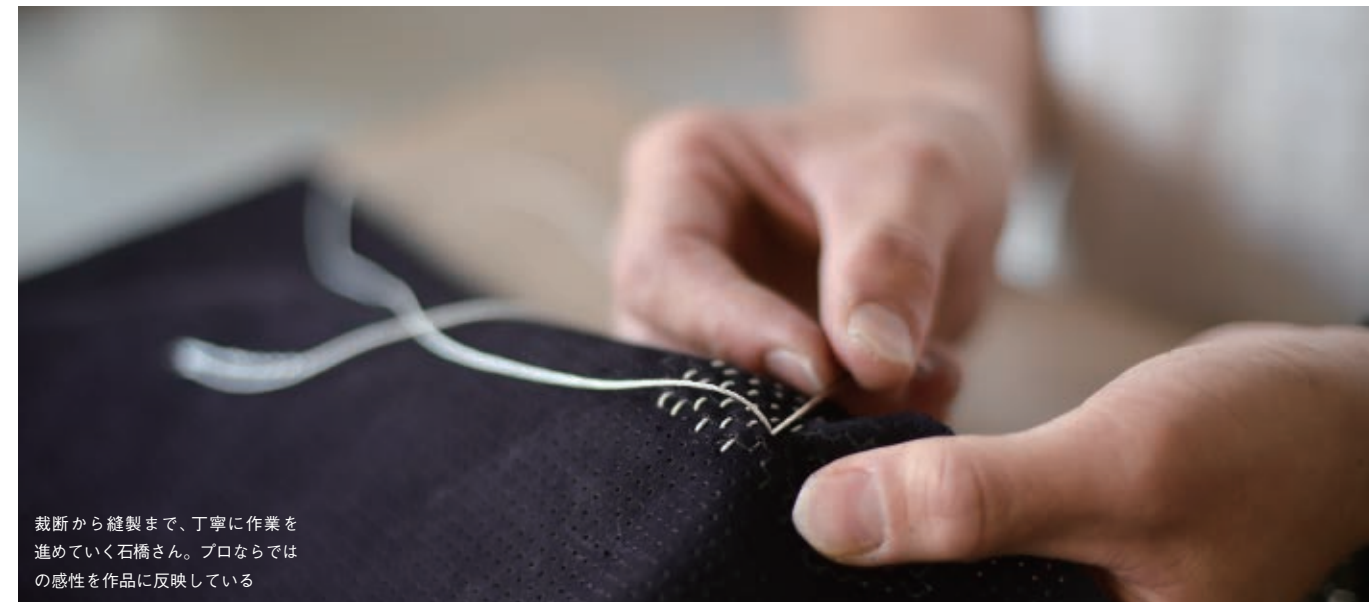
淡白で欲のないスタンスを長年キープしつつ、ついに射止めたグランプリの座。今回も受賞に向けて特別な対策を練ったわけではない。だが、石橋さんは作品を応募した後、「ジャパンレザーアワード 2023」のホームページを見てあることに気づいた。

「審査員の方たちから期待されている要素が、今回の作品にことごとく当てはまったんです。直感的に何かしら受賞できるかも、と思いました」

入賞を目指すのではなく、シンプルにかっこいい作品をつくりたいという思いが先に立つ。クリエイターとしての嗅覚は、時代のニーズをナチュラルに作品へと落とし込む。自分のためのものづくりだから、けっして妥協はしない。時間とコストにとらわれず、最高だと思えるものをつくることをモットーとしている。

「いつも思っているのは、プロが本気で遊んだらすごいものができるんだぞ、ということです」

すでに受賞作のバージョン2を構想しているという石橋さん。湧き出る創作意欲のおもむくままに、これからも「プロによる本気の遊び」を極めるつもりだ。



裁断から縫製まで、丁寧に作業を進めていく石橋さん。プロならではの感性を作品に反映している



西野 裕二さん NISHINO Yuji

作品名 擬態
にしのかつみせ
所属 西野靴店

受賞作品詳細は
こちらへ



受賞者動画を
配信中!



無骨なソールと独自染色で 樹木に“擬態”する一足

「昔、ソールをすごくラフにカットした靴を見たことがあり、そのときの衝撃が印象に残っていました」

西野裕二さんが靴づくりを始めてしばらくたったころ、この靴のことを思い出した。「一見すると、まるで切り株のようなソールのその靴が忘れられなく。それだけでもかっこいい印象でしたが、アッパーも木のようにしたらどうだろう、と。そこから誕生したのが、今回の作品です」

木目調のプリントでは意味がない。そこで、オリジナルの染色を施そうと考え、その最適素材として白ヌメ革に注目した。「妻に染めてもらいました。バイクのペイントなどをしているので、着色は本業。センスも抜群なので、全幅の信頼をおいています」

パーツによって、濃淡を変化させていると、奥様の恵子さんが教えてくれた。プリントでは

均一の木目になってしまうが、天然素材でありナチュラルな風合いが特徴のヌメ革、そこに絶妙な染め加減が加わることで奥深い表情が生まれる。デザインは、男女問わず履きやすいスリッポンスタイル。靴底は縫い糸が露出しないヒドウンチャネル製法で仕上げ、より樹木への擬態化にこだわった。

20代中盤から靴づくりを始め、仕事の傍ら靴を制作してきた西野さん。2014年、広島駅そばに念願の「西野靴店」をオープンした。当初は、修理をメインにスタート。フルオーダーメイドの受注を開始したのは、この1年のことだという。

修理も、制作も、俺が一番うまいに決まっている。西野さんは満面の笑顔でそういった。「いや、そういえなきやだめだろうって。この仕事を始めたときから思っていました。実際、他のところで手に負えない修理品が、うちに来ることもよくあります。それくらいじゃなきゃ、本当にすごい人にはなれないですよ」



上／複数の茶系染料を筆に含ませ、木目調に仕上げる。
下／ソールの切削には、一般的なカッターを用いた

青木 健治さん AOKI Kenji

作品名 cocoon

所属 Takivi Leathers

受賞作品詳細は
こちらへ



受賞者動画を
配信中!



プリミティブなモカシンと 本格的革靴ソールの融合

モカシンとは、アメリカの先住民が履いていたスリッポンタイプの履きものが原型。本来は革1枚で足を包み込む構造だが、現在はアッパーをU字型に縫い合わせるタイプが主流だ。カジュアルシューズとして人気が高く、ソールは薄めに仕立てられている場合が多い。「モカシンに、安定感のある革靴のソールをくっつけてみたら? って。妻の何気ないひと言から誕生したのが、今回の作品なんです」

青木健治さんはそう話す。ソール部分は、アウトソールを出し縫いで取り付ける、ブラックラピッド製法がベース。「ウェッジ部分にコルクを組み込むことで、スニーカー並みの軽量化を図りました」

アッパーの構造についても、彼ならではの哲学が隠されている。「“革の袋で足を包み込む”という古来のモカシンを、どうやったら現代風に再構築で

きるか、ということを考えていたんです。結果、アッパーを上部と下部に分けてそれぞれを吊り込み、同じ革でつくった紐で編み合わせる製法にたどり着きました」

革製品の制作を始めたのは20歳のころ。靴の修理士としてキャリアを積み、2015年には会社員として働く傍ら「Takivi Leathers」を立ち上げた。その後2017年、11年間勤めた会社を退職。親戚が所有する空き家が静岡の山中にあると聞き、工房を持つにはもってこいだと移住に踏みきる。

「目標は、無理なく長く、ブランドを続けていくことです」

靴づくりだけに経済基盤を求めず、いまもあえて別の仕事をもっている。「ものづくりは、あくまで自分の表現の形。これを生活の糧にしようとする、いろんな矛盾が生じちゃうと思うんです」

住む場所も、仕事も、自己表現も、全ては自分次第。そんな軽やかな生き方の中にこそ、心動かすものづくりスピリットが宿るのだ。



上部と下部を結びつける紐は、本体と同じレザーから自ら切り出したものを使用。丁寧に編み合わせていく

紀井 長さん KII Nagashi

作品名 **REshuse16**
[1998&2004 LEATHER×KNIT UPPER×
vibram LB078 Canter]

所属 個人

受賞作品詳細は
こちらへ



受賞者動画を
配信中!



持続可能素材としての 革の魅力を伝える一足

紀井長さんは、ヒコ・みづのジュエリーカレッジの講師。コロナで対面授業が休講になった際に、何か学生に発信する方法はないかと思案。毎日必ず1本、Instagramで靴づくり動画を投稿することを自らに課した。「制作のコンセプトは、靴の『Shoe』と『Reuse』をかけた、『Reshuse』。古い靴のパーツを組み合わせ、新たな命を吹き込む靴づくりです」

そもそもまったく異なる木型でつくられている靴同士なので、見た目はもちろん、履き心地にまで配慮した調整は細部にまで及ぶ。それを成立させることができるのは、長年業界に身を置いてきたその経験ゆえだ。「でも学生に一番伝えたかったのは、ものづくりに対する姿勢。いまの状況でできることをやってみよう、そんな気持ちで始めました」今回の受賞作品も、Reshuseの考え方が

ら発想した一足だ。「黒の革は25年前に購入したもののなんです、見るとすぐ状態が良い。四半世紀を経ても素材として遜色ないというのは、レザー本来のポテンシャルに他なりません」

相棒に選んだベージュの革も、屋根裏のデッドストック。こちらは19年ものだという。「中に組み入れたニット靴は、以前、近所履きとして購入したもの。ソールには、リペア用のビブラムソールを採用しました」

教師として大切にしていることを問えば、「楽しい気持ちを植えつけること」と即答。「楽しいと思ったら、周りからとやかくいわれなくてもやり続けられる。それを伝えるためには、まず自分たち大人が楽しんでなきゃダメ。希望を与えられない社会になっているとしたら、我々の責任も大きいと思います」

もういらないといわれる日まで、教育者を続けたいと紀井さんは話す。人に求められるのが幸せ——。そう笑う彼の人間力と技術力が、未来のシューメーカーを育てている。



上/学校ではデザイン、パターン、縫製、底付、作品のプレゼンテーションまで指導。下/手描きのアイデアブック

平田 史明さん HIRATA Fumiaki

作品名 トートバッグ

所属 アンドムー
&6

受賞作品詳細は
こちらへ



受賞者動画を
配信中!



形態変化の中に宿る 美しきデザイン

「新しい作品に取り組むときは、まず床革でサンプルをつくるんです。そのときに、あれ、この形はおもしろいぞ、って発見がある」

上部四隅を外側に折り返して留めることで立体的なカーブを生み出し、それをデザインとして成立させた本作は、その発見から生まれた。ホックを外せば、容量を増やすことができる“変身する鞆”だ。

もっとも苦労したのは、見返し部分。目につきにくいパーツではあるが、細かいディテールの美しさにもこだわったかったという。「内部に革の帯を通してありますが、最初はその段差が浮き上がって外から見えてしまう状態だったんです。革のすき具合を調整したり、革同士が同じ場所で重ならないようにしたり、いろいろと試行錯誤しました」

素材には、国産プルアップレザーを採用。一般的なオイルレザーよりも多くのオイル

を用い、革の芯まで浸透させてあることが特徴だ。

「初めて見たときに、この透明感に驚きました。表面に薄く水の膜が張っているかのような繊細さと、レザーならではの深い味わいが同居する、独特の質感なんですよ」

木の実や果物など、自然の造形をデザインのヒントにすることも多いという平田史明さん。「でも、有機的な曲線であればなんでもいい、というわけではないんです。スーパーに買いものに行っても、このみかんのシルエットはいいけど、こっちはいまいち、なんて、無意識に考えちゃっていますね」

2022年に立ち上げた「&6」は、奥様の麻吏奈さんと共同で運営するブランドだ。彼女が手がけるのは、真鍮やシルバーを使ったアクセサリー。ゆくゆくは、平田さんのバッグにオリジナルデザインの金具を組み合わせるなど、コラボレーションも考えていると話す。

家族がいてこそ、唯一無二のものづくり。&6の冒険は、始まったばかりだ。



上/ホックを外すことで、いっきに容量が増える。下/今回の作品のための型紙。現在は、色違いを制作中

多田 智美さん TADA Tomomi

作品名 **have roots**

所属 **OFFcoast**

受賞作品詳細は
こちらへ



受賞者動画を
配信中!



ルーツを探る旅から発想 人生を表現した意欲作

「2年ほど前でしょか、自分のルーツをたどる旅に出ようと思ったんです」

受賞作品「have roots」の制作背景について、多田智美さんはそう切り出した。家庭の事情で、幼いころに疎遠になってしまった祖父母。若いころは蓋をしていたその関係性に改めて向き合おうと思ったのだという。「6歳くらいの記憶をたどって、祖父母が住んでいた団地を目指すことにしました。意外に覚えているもので、たどり着けたんです」

しかし、そこはすでに空き家となっていた。「直感的に、あ、おばあちゃん亡くなったんだな、って。でも、その事実がわかったことで、すごくすっきりするものがありました」

忘れていた記憶。思い出した事実。そして現実。どんなに平坦に見える人生でも、そこに至るまでさまざまな物語がある。「ルーツを自ら持ち歩く」、それが本作品のコンセプトだ。

「素材に選んだ牛革は、0.7mmまですいてもらいました。理想的なボコボコ感を表現するためには、この薄さが必要だったんです」

凹凸部分の型紙はつくらず、直感で裁断、縫製。しかも、使っているのは洋服用の直線ミシンのみだというから驚く。

「新聞は昭和3年の大阪朝日。これを『過去』を象徴するアイテムとして組み込みました」

2022年に、自身のブランド「OFFcoast」を立ち上げた多田さん。皮革素材の生産現場にも足を運び、学びを深めているという。副産物である皮革素材が生まれる工程について、ときにはお客さんに対してもじっくり話をする。「ビーガンの知り合いが、あるときうちのバッグを買ってくれたんです。理由を聞いたら、勉強したうえでレザーを使っている私を信用できたから、って。うれしかったですね」

天然素材であるがゆえに持つ、生きていた証。そこにルーツを原点にした自分の“生”を込める。“ものづくり”を通じて紡ぐ“ものがたり”が、本作にはあった。



上／レザーの多くは、懸念にしている姫路のヒライコーポレーションで購入。下／今作に使った昭和3年の新聞

野沢 浩道さん NOZAWA Hiromichi

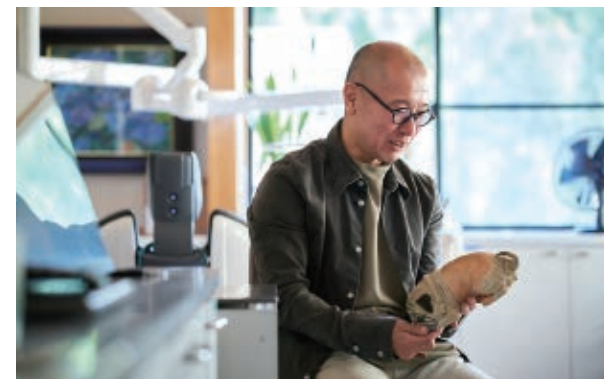
作品名 **Memory of PAM**

所属 **個人**

受賞作品詳細は
こちらへ



受賞者動画を
配信中!



積層と切削でつくる愛犬 アイデア満載のオルゴール

一見すると、今にも動き出しそうなリアルな造形。上目遣いにこちらを見つめるのは、4年前に11歳でこの世を去った野沢浩道さんの愛犬、パグのPAMだ。

「亡くなって少し経ったところから、レザーでPAMをつくりたいという想いを温めていたんです。中にオルゴールを仕込みたいという構想も、初期段階からありました」

立体作品となれば当然、リアルなフォルムをもって視覚に訴えかける。加えて、手に抱いたときに感じる、触覚。そこに、PAMと過ごしたところによく聴いていた流行歌のオルゴールを組み合わせることで、聴覚にも訴えかけられるというのがコンセプトだ。

革を積層させ、削る。これを繰り返すことによって、形をつくり上げている。生き物由来の素材だからこそ表現できる質感。重ねては削り、繰り返すことで生前の触れ合いを思い出していく。

「万が一削り過ぎても、革なら再度貼り重ねてやり直しも可能。削りやすい点も魅力です」

最終的に、表面に毛皮をかぶせて着色。こうすることで、顔周りや首筋のリアルなしわを実現した。注目は、背中の一部に毛皮ではなくヌメ革を使用している点だ。「あえて不自然なビジュアルにすることによって、PAMがすでにこの世にはいないという不完全性を表現しています」

オルゴールのスイッチは、前脚の前に伸びた紐。先端にPAMの好物だった“焼き芋”が取り付けられており、これを引くことで音楽が流れる仕組みを採用した。

2016年から出品を続けている野沢さんは今回の応募で16作品目になる。しかし挑戦してみたい作品の構想は尽きないという。「最終的に一番つくってみたいと思っているのは、若いころから好きな椅子なんです」

発想も工程も、梓にとらわれない唯一無二のものづくり。これからどんな夢ある逸品が生み出されるのか、楽しみでならない。



上／下部の外周を持ち上げることで、より音が反響するよう工夫。下／やわらかい革は、木に比べて造詣が容易

北崎 厚志さん KITAZAKI Atsushi

作品名 ジビエ鹿革半纏
(見立文覚宗三郎滝行図)

所属 chelsea leather art work

受賞作品詳細は
こちらへ



受賞者動画を
配信中!



純国産ジビエ鹿革の革半纏 技巧と発想で“粋”を伝える

「約120年前の革半纏を所有しており、これをいつかつくってみたいと思っていました」

日本の革で勝負するジャパンレザーアワードを知り、絶好の機会であると奮起する。「実際に着用することを想定してデザインを始めました。着丈は長すぎず、袖口は職人半纏に見られる『鉄砲袖』という狭い筒袖に。総手縫いで仕立てました」

素材に選んだのは、地元である広島で生産された純国産のジビエ鹿革。「最優先は、論より質。この革は、純国産であるうに本当に質が良かったんです」

表面は柿渋染め。襟元の文字は、江戸時代の草書体をベースにアレンジしたオリジナル。左襟に自身の名前「厚志」をもじった「志ん公」、右襟に広島を意味する「芸州」とある。一方、背面の大紋はハネが特徴的な「髭文字」の要素をプラスし、「革」の一字を。その下の腰

柄に、サイコロの目で「3」と「6」。足して「9」ということで、通して読むと「革」「サイ」「9」。「革細工」と読ませる洒落をきかせている。

ひときわ目を引くのは「宗珉の滝」を題材にしたという裏面の絵柄。講談や落語で知られる彫金職人が名人になるまでの物語だ。「鰐に彫った滝に魂がこもり過ぎて、なんとしづきが出た、というお話。これにちなんで、滝のしづきが外に飛び出すように描きました」

5年間アパレル会社に勤め、26歳で独立。「chelsea leather art work」を立ち上げた北崎さん。夢は、「名人になること」だと話す。「技術があることはもちろん、常識では考えられない離れ業をやっているのが名人。だからこそその作品は、百年以上にわたり世に遺るのだと思います。そんな、時代を超える何かをつくりたい。結果、後世の誰かが、僕のことを“名人”と呼んでくれたら本望です」

自らを信じ、努力を惜しまない者にこそ、道は開ける。彼の描く未来は、きっと百年を待たずして訪れるに違いない。



上／「革」にサイコロの「3」と「6」で「革細工」。下／裏地はなし。革の裏面に直接染料で絵柄を施している

工藤 サトミさん KUDO Satomi

作品名 ミライツクルクツ

所属 ラムケレ
ramkere

受賞作品詳細は
こちらへ



受賞者動画を
配信中!



子どものデザインを現実に 自己肯定感を高める靴づくり

赤いうろこに、睨みをきかせる大きな目玉。ドラゴンを模したその作品は、一度見たら忘れられない強烈なインパクトを放っている。「私は靴を制作するパートのみを担当。デザインしてくれたのは、じつは中学生なんです」

子どもたちからデザイン画を募り、それをもとに実際の靴をつくりあげる。これが、工藤サトミさんの作品のアイデアだ。「描いた絵が現実になったら、本人にとってはすごく『自分を認められた体験』になるんじゃないかなって。そう考えました」

小さい頃は夢中になった、ものづくり。でも、歳を重ねて本格的に取り組もうとすると「私には難しい」と、諦めてしまう人も多い。その可能性の火を消さないために、この取り組みを思いついたのだと工藤さんは話す。「受賞作は、よっしーくんという中学生が描いた『よしドラゴン』。その造形的な難しさ

にチャレンジしたい、そう思いました」

もとはネイビーだった牛の型押しレザーの銀面を削り、筆で丁寧に赤い顔料をのせる。「刷毛でいっきに塗ると、溝が埋まってしまって、うろこの雰囲気が出ない。1枚1枚塗り続ける、なかなか根気のいる作業でした」

これを、ぬいぐるみをつくる要領を参考に、有機的なラインで立体的に縫製した。「シューレースをつけてしまっただけでは、せっかくのドラゴンが台無し。でも、履き心地もきちんと実現したかったので、ゴムでフィット感を出すなど、見た目との両立を図りました」

この春、ヒコ・みづのジュエリーカレッジを卒業。オーダーメイドスニーカーブランド、「ramkere」を立ち上げた。「最初にきた注文は、じつは今回の『よしドラゴン』の色違いが欲しいというリクエスト。これが記念すべき初受注になりました」

ブランドのモットーは、「ココロオドルクツヤ」。楽しそうに話をするその眼差しには、わくわくする未来しか映っていない。



上／立体的な縫製で、ドラゴンの顔を生み出していく。下／後ろに見えるのが、中学生の描いたデザイン画

宮代 結菜さん

MIYASHIRO Yuina

作品名 CORE

所属 上田安子服飾専門学校

受賞作品詳細は
こちらへ



受賞者動画を
配信中!



感情を生み出す根源 人間の内部を異素材で表現

「SNSなどで見られる誹謗中傷。そんな負の感情は、一体どこから生み出されているんだろう、と日々思っていました。それはもしかすると『内側から湧き出しているものなのでは?』と考えたときに、『人間の内側』、つまりは『骨と内臓』が思い浮かんだんです」

背に当たる部分とあばら骨は、それぞれ黒と白のレザーで制作。

「白は実際の骨のように、真っ白すぎず少しグレーがかったものを選びました」

サイドは透明のビニールで仕上げ、より“内

面”が見えるよう工夫されている。注目したいのは、あばら骨の間から見え隠れる、さまざまな臓器に使用した素材だ。心臓はツイード生地。赤と紫のレザーで、胃と肝臓を。上部にはイエローベースの紐で食道と気管を表現し、全体に配置した赤いフェザーは毛細血管を表しているという。

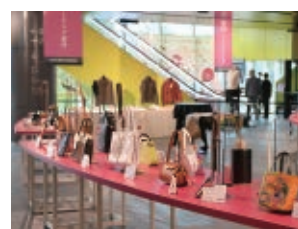
「異なる素材を組み合わせることで、人間の複雑さを表現しています」

バッグの魅力とは? 最後にストレートな質問を投げかけてみた。

「コーディネート完成させるパワーを持っていると思うんです。バッグを持つだけで、一気に全身が引き締まる。そう感じています」



上/制作に取り組み実習は、週に6時間。下/ファスナーを開けると、レザーの「胃」と「肝臓」が顔を出す



国内最大の 革製品コンテスト&イベント

今年も東京・渋谷ストリームホールにて審査会と応募作品展が同時開催された。例年、審査員が部門賞を選定、その中からグランプリを決定する方法をとっていたが、例年以上に秀逸な作品が集まったこともあり、「選定作品」として48作品を選定。その中から部門賞およびグランプリの決定となった。日本ならではのアイデアや素材を生かした革製品たちが会場に並び、訪れた人たちに新たな発見を提供した。会場では並行して、体験ブース（展示やワークショップ）、また昨年からは好評だった皮革素材を使った世界の楽器による演奏会も開催。コンテストだけではなく、革の魅力に触れる絶好の機会に、大人から子どもまで楽しめるイベントとなった。

ジャパンレザーアワードとは

国産のなめし革などを使用した作品を対象とする国内最大の革製品コンテストで、フットウェア、バッグ、衣料・服飾雑貨などの革を用いた製品の、新たな可能性を見出すことのできる人材の発掘と育成を目指しています。

